

現代青年の自己受容に関する分析

An Analytical Study on Recent Adolescent's Self-Acceptance

菱 田 陽 子

問 題

「自己受容」は、カウンセリングを受けるクライアントの達すべき目標の一つとしてあげられている。一般的に「自己受容」は、自発的な行動変化の原点となり、対人関係の基盤となると言われている(遠藤,『心理学辞典』,有斐閣,1999)。「自己受容」に関する研究は数多くなされており、「自己受容」尺度も少なくない。例えば, Berger (1952) の自己受容と他者受容尺度, 宮沢 (1979, 1980) の尺度, 沢崎 (1993) の尺度などがある。

Rogers は、セラピーの過程における特徴的なステップを12段階あげており、そのステップの中で、「カウンセラーはクライアントの否定的な感情も肯定的な感情も、クライアントのパーソナリティの一部としてそのまま受容し認識する。このカウンセラーの受容が、クライアントにありのままの自分自身を理解する、生まれてはじめての機会を与える」、「この機会によってクライアントに洞察と自己理解が自発的に出て、その洞察が発展する」、「この洞察、自己理解、自己受容により、クライアントは新しいレベルの統合へ前進する」としている。この最終段階は、「洞察、自己理解、自己受容によるクライアントの統合された肯定的行動」であると述べている (Rogers 1942)。更に Rogers (1986) は、「家庭環境よりも、自己理解の度合い、自己受容の度合い、自分の状況を現実的に受け入れる度合い、自己に対して責任を持つ度合いが将来の行動を予測する」とし、又、「自己の概念、自信、自己に対する信頼、自己尊重などの変容は、個人がその人自身と現実を受容することによる」としている。この考えの基礎には「すべての人間は自分自身の中にみずからの人生を導いていく能力をもっている」という彼の考え方がある。

「自己受容」している人はその個人にとって、「最大限の適応」をなし、「よき生き方」をしていると考えられる (Kirschenbaum et al., 1989)。しかしながら、この「よき生き方」について、Rogers (1961) は、そういう「適応」、そういう「自己受容」していると思われる「よき生き方」は、「一つの過程 (プロセス) であって、ある状態ではない」と言っている。更に、「それは方向 (direction) であって、目的地 (destination) ではない」とし、彼の経験から「よき生き方は、内面的自由のある、ある方向へのプロセスであり、普遍性の一般的性質をもっている」と考えている。よき生き方のプロセスを歩み始めた人は、実存的な生き方に向かい、それは、成熟した生き方の特長であるとも述べている。更に、この心理的に自由な人は「もっと十分に機能する人間 (a more fully functioning person) になる方向性をもつ」と言い、その人間は、「自分自身になるという方向に向かう」と述べている。

こうした人間は、環境に順応し、新しい条件に「創造的に健全な適応」をしていくであろうとしている。「よき生き方の中に生きるというプロセスは大きな豊かさ」を持つとも述べており、この豊かさは「自分自身についての心のそこからの自信」のゆえであり、この自信は「人生に出会うための信頼すべき道具」であるとしている。この豊かさは自分の苦しさの気持ちも受容し、生き生きと生きることを内容としている。

Maslow(1954, 1970)は、自己実現的人間（健康な人々）は、「自分自身やその性質を無念さや不平を感じずに、また、その問題についてあまり考えることなく受け入れることができる」と述べ、「彼ら自身の人間性をその欠点を認め、理想の姿とは食い違っていることを承知しながらも、受け入れる」「人間性の脆さや罪深さや弱さ、邪悪さを、自然を自然のまま無条件に受け入れるのと同じ精神で受け入れることができる」し、「そのまま受け止める」が「東洋的な意味での諦めと同じものではない」と述べている。「すべてのレベルで自分自身を受容」でき、「自分の欠点とさえ快適に共存して生きていける」とする受容観を述べている。

宮沢（1979）は自己受容性を「自己をあるがままに受け入れることである」と定義し、自己受容側面には、自己の諸側面を自覚・理解している面を含むと考え、以下の4側面で捉えている。すなわち、①自己理解：自己の諸側面をあるがままに理解しようとすることであり、自己に冷静な目を向け、自分のことが良くわかっていると自己認知すること、②自己承認：現在の自己を否定することがなく、現在の自己を承認すること、③自己価値：自分を価値のある存在とみること、④自己信頼：現在の自己及び将来の自己の可能性に対して信頼感をもつこと、である。

このように自己受容には、自己に対する評価的態度から見たものと、欠点や脆さを含みながらもトータルとしてよきものとしてみる臨床的な見方があると思われる。自己概念をレビューしたWylie(1974)は自己満足度（self-satisfaction）、自己受容（self-acceptance）、自尊心（self-esteem）、自己好意度（self-favorability）、自己と理想自己の一致度（congruence between self and ideal self）、自己と理想自己のずれ（discrepancy between self and ideal self）などは同義ではないものの、重複する部分が多いので、自己尊重（self-regard）ということばで表しているが（沢崎1984）、この見方は自己に対する評価的態度から見た実証的定義と考えられる。

沢崎（1984, 1993）は、実証的定義は、Rogersらの臨床的考え方からみた自己受容とは力点の置かれる場所が違ふと述べ、臨床的経験から社会的に望ましくないとされる自己の属性の受容を問題とする新しい観点を導入した。望ましい属性の受容は、好き、満足している、気に入っているといった言葉で表現されるが、望ましくないとされる属性が受容されるということは、そのことに対して、否定的な感情を持たない、こだわらない、とらわれないといった状態であると考えている。

この考えをもとに、沢崎は、自己受容を実証的研究で操作可能なものとして扱うための方策として、質問紙などの自己報告形式の調査では、正確で客観的な自己認知を捉えることは難しいとしながらも、質問紙によって調査できる自己受容尺度を提案している。沢崎（1984, 1993）は、自己受容の基本的概念を、①自己認知と自己受容は相互依存的な関係にあり、自己認知は自己受容の前提条件あるいは必要条件である、②自己受容は認知した属性を否定的に評価せず、こだわらない気に

ならないという状態として捉える、としている。この概念のもとに、以下の4点を考慮し、尺度を作成している。この4点とは、①属性に対する自己認知は問わない。自己認知が肯定的であれ、否定的であれ、その属性が受容されているかどうかの問題である、②質問紙の選択肢の表現を「好き」「満足している」などとせず、「それでよい」「そのままよい」としたほうが、否定的な自己認知の際、答えやすく定義に近いと考える、③自己受容の対象となる自己の領域を、社会的存在としての自己のあり方や自己の投影されたものに拡大し、トータルな存在としての自己へのアプローチを試みた、④人間の生涯を通じての自己受容の様相・変化の検討も可能である項目・表現とする、である（沢崎1993）。

沢崎はこれらの観点から自己受容を測定するために、自己認知や自己受容に関する先行研究を参考に、身体的自己、精神的自己、社会的自己、役割的自己、全体的自己の5領域を考えている。

筆者も、自己受容を自己に対する肯定的評価というように一面的に捉えるのではなく、トータルとしての自分の受け容れを中心にその内容を明らかにしたいと考えた。沢崎の自己受容尺度は、自己認知と自己受容を組み合わせ、妥当性・信頼性のある尺度として高く評価され、支持されていると思われる。沢崎（1984）は自己受容の内容を文章で表現し自己評定で自己受容を測定する方法では、①社会的望ましさに関与しやすい、②自己受容より、健康な人格、成熟した人格というような広い概念を測定する形式になりやすい、③項目作成の前提となる自己受容の定義の妥当性に対する疑問、などの問題点があるとして、文章ではなく、「年齢」「性別」「健康状態」「顔立ち」のように名詞の形でできている。ただし、筆者は、逆に、被験者の自己受容の状態を測る側面として「年齢」「性別」「健康状態」「顔立ち」など個人の外面的な所属属性からきくことや、「やさしさ」「まじめさ」「明るさ」などの内面属性を、単刀直入な名詞できくことでその項目の自己受容を測定することに疑問を感じている。例えば「やさしさ」や「まじめさ」という側面を「やさしさ」や「まじめさ」という言葉できくことによってはかることができるであろうか。「やさしさ」や「まじめさ」の解釈はかなり難しいと思われるし、個人差も大きいのではないだろうか。「やさしさ」や「まじめさ」と言葉できかれて、自分の「やさしさ」は「気になる」「まったくいやだ、気にいらぬ」と答えて受容していないように思われる被験者でも、他の複数の文章で「やさしさ」や「まじめさ」を複数の側面からきくことによって、「そのままよい」という受容状態として測られるケースもあると思われる。このようなリスクを多少少なくするために、それぞれの自己受容側面を複数の文章の質問項目できくことによって、複雑な自己受容をきくことに近づくことができるとも考えられる。この考えに基づき、ここでは、文章の質問項目で内面の自己受容状態を測ることを試みたい。

以上のように、自己受容は、自己に対する評価的態度、つまり、自己尊重（self-regard）から捉えられたり、ロジャーズ、マズローらのように、臨床的に捉えたりしている。いずれにしても、これらは人間の適応との関連から有効な情報を与えてきている。そしてこれらの自己受容の中には、文字通り自らを受け容れることが強調され、その中には他人からの視点、あるいは社会的視点からは必ずしもプラスの評価を与えられない側面をも含めた、トータルとしての自分の受け容れが考えられているものも見受けられる。筆者はこのような一般的には必ずしもプラスに評価されない部分

菱 田 陽 子

を含みながら自らを受け容れる自己受容を中心にその内容を明らかにしたい。

今日、日本の青年が生活している環境は、経済不況があり、環境問題があるとはいえ、彼らが平和に過ごすことを望めば、可能であるといえる。平和に過ごすということが心豊かに過ごすことも意味しているとすれば、それもまた、可能であると考えられる。人間は本質的に豊かに幸せに暮らすことを望むと仮定してもよいとすれば、現代の日本の青年たちの多くは、自分を受容し、他から受容され、心豊かに暮らしていると考えられるにもかかわらず、専門学校・短大・4年生大学に通う青年たちの心の状態は、必ずしも豊かとは思われない。むしろ、ひ弱でやせた心を感じることも多い。筆者は短大で教鞭をとり、学生とかかわり、彼らの心の問題を共に考えるなかで、自分を受け容れることができずに苦しむ学生の姿を見てきている。Rogers の言うように、「よき生き方」は、自己受容のもとに成り立つものであるとしたら、なぜ、彼らは、豊かな心を育むことができなかったのか、もしくはできずにいるのか、豊かさの意味を教育の中で、学んできたのか、体の育ちと心の育ちのバランスの悪さは何に由来するのか。これらの問題解決の糸口はどこにあるのかを考えるにあたり、まず、現代青年の自己受容の状態、もしくは、自己受容に対する考え方・意識構造を明らかにしたいと考えるにいたった。

自己受容は他者による受容にも大きく関与しているとも思われる。十分愛され、受容されることによって、安定した受容感もしくは、受容観が養われるとも考えられる。この養いの中心は、親、教師など周囲の大人によってなされるとしたら、青年の心の育ちに大きくかかわった大人は、何を与える必要があったのか。かかわる大人自体、安定した、豊かな心を持っているであろうか。青年の自己受容は、大人とのかかわり、大人が作り上げた社会とのかかわりとともに、見つめる必要があるのかもしれない。本研究では、この点まで言及できないが、今後、継続した問題として捉えていきたい。

目 的

本研究では、これまでの自己受容のとらえ方を参考にしつつ、これまでとはやゝ異なる視点、即ち、「自分らしい自分」を生きるために、自分の中の弱点も含んだ、ありのままの自分を受け入れることを中心とした「自己受容」の姿を明らかにしたい。具体的には、以下の事柄を明らかにすることを目的とする。

- 1) ここでの視点から考える、現代青年の中に存在すると思われる「自己受容」を測定することを目指した尺度を構成し、その因子構造を明らかにする。以下、この尺度を「菱田尺度」と呼ぶこととする。
- 2) この測定尺度の妥当性を検証するために、既に沢崎（1993）によって作成されている自己受容尺度（以下、これを「沢崎尺度」と呼ぶ。）との関係を明らかにする。この両者間のある程度の相関が認められれば、一定の妥当性が確認されたと考えられる。また、両尺度間の相関から、本菱田尺度固有の特性を確認することができると考える。

- 3) 現代青年の自己受容の特徴を明らかにする目的で、自己受容傾向と関連すると推測される特性を考え、それらの特性との相関関係を明らかにする。ここでは自己受容傾向と関連する特性としては、「安定した人生観を有すること」、「メタ認知（自己客観視）能力」、「自立・自律性の確立」、「適切な対人関係」、「がんばり」、「熱中傾向」を仮定し、それを表現する質問項目を作成し、その因子構造を確認する。即ち、安定した人生観を持っていること、自己客観視を始めとしてメタ認知的思考ができること、自立していること、対人関係が健全であること、ものごとへの取り組みが積極的で努力すること、ものごとへの熱中傾向があること、などが自己受容を促進するであろうと考えた。
- 4) 自己受容とこれらの諸特性との関係を解明する。上で仮定した諸特性と自己受容傾向が、実際にここで仮定した通りのものであるか、ここで作成した自己受容尺度による自己受容傾向は、実際にどのような特徴を持つかを明らかにする。

方 法

調 査 対 象：国立大学学部学生70名，私立短期大学生249名，専門学校生53名の計372名。

平均年齢 19.5歳。男51名，女321名。

調 査 時 期：2002年1月下旬。

質問紙の構成：①自己受容と関連があると考えられる「特性」尺度（35項目）。②本研究のために作成した「自己受容」尺度（菱田尺度，20項目）。③沢崎（1993）による「自己受容」尺度（沢崎尺度，35項目）からなる。

調 査 手 続 き：質問紙を教室で一斉配布し，記入を求め，記入後その場で回収した。回答に不備のあるものを除き，分析対象数は372。

結果と考察

1. 自己受容の因子構造

本研究のために作成した菱田尺度の因子構造を明らかにするため，因子分析（主因子法，バリマックス法による軸の回転）を行った。その際，いずれの因子の因子負荷量も極端に低い項目（因子負荷量の絶対値が0.30未満）を除いた14項目から，2因子を抽出した（Table 1）。因子分析結果は軸の回転後の因子負荷量を示しており，因子負荷量の絶対値が.300以上のものを太字で示し，因子負荷量及び共通性については小数点を省略している。

ここで作成した菱田尺度については，「自己理解」，「自尊感情」，「自信・自己信頼感」及び「トータルとしての自己受容・弱点の受け入れ」の4因子構造を仮定したが，結果は2因子構造となった。

第Ⅰ因子は，誰に反論されても揺るがない考えをもっていて，人からの相談に自信を持って答えられる「自信と自己信頼感」，自分の考え方や行動・長所を知っている「自己理解」，自分の個性や

菱 田 陽 子

弱点を受け入れ、欠点も時には長所と考え、気にいらぬ点があっても自分を嫌いではない「弱点を受け入れたトータルとしての自己受容」傾向に、最も分かりにくいのが自分のことかもしれないと考える内省傾向が加味された内容を示している。これらはまとめて、自己理解と弱点の受け入れが加味された自信のある生き方・態度を表す因子と考えられるため、「自信」因子とした。

第Ⅱ因子は、自分に気に入っている点があり、自分にふさわしい役割があると考え肯定的な「自尊感情」、悩んでいるときの自分や気に入らないところのある自分も好きであり欠点も時には長所と考える「弱点も含んだトータルとしての自己受容」傾向、自分の揺るがない考え方をもち自分はどんな人間だろうかと考えることも好きという内省傾向を内容としている。これらをまとめて、自分の生き方など自分自身について考えることを好む傾向を表す因子と考えられるため「自分を考えることが好き」因子とした。

ここでも分析によれば、仮定した「弱点も含んだトータルとしての自己受容」因子は抽出されなかったが、弱点の受け入れに該当すると考えた項目「気にいらぬところがあるが、自分をきらいではない」及び「自分の個性が好き」は0.3以上の因子負荷量を示し、第Ⅱ因子「自分を考えることの好きさ」因子に大きく貢献していることから、自己受容構造に「弱点も含んだトータルとしての自己受容」が含まれていると考えられる。

Table1 自己受容の因子構造

| 項 目 | I | II | h ² |
|------------------|-------|-------|----------------|
| 自分の個性が好きである | .567 | .469 | .542 |
| 積極的に生きているほうである | .537 | .206 | .331 |
| 気にいらぬけどきらいでない | .464 | .332 | .326 |
| 相談受けたら自信もって答えられる | .436 | .107 | .201 |
| 反論されても揺るがない考えもって | .418 | .385 | .323 |
| 自分の行動のしかたが分かっている | .373 | .318 | .240 |
| 目立ちたくないと思う傾向がある | -.338 | -.037 | .116 |
| 最も分かりにくいのが自分のこと | -.351 | .022 | .124 |
| 自分の長所がよく分からない | -.620 | -.236 | .440 |
| 自分はどんな人間と考えるのが好き | .005 | .623 | .388 |
| 悩んでいる自分の姿も好きである | -.013 | .597 | .356 |
| 私に気に入っているところがある | .402 | .560 | .475 |
| 自分にふさわしい役割があると思う | .313 | .490 | .338 |
| 自分の欠点は時には長所になる | .213 | .375 | .186 |
| Σ a ² | 2.256 | 2.13 | 4.386 |
| % | 16.1 | 15.2 | 31.3 |

2. 「自己受容」尺度の妥当性

(1) 沢崎の自己受容尺度の因子構造

菱田尺度の妥当性を確認するため、並びに、菱田尺度の特色を明らかにするために、ここでは代表的な既成尺度として、沢崎尺度を取り上げ、これに対する回答を求めている。まず、この沢崎尺度の因子構造を明らかにするため、上と同様の手続きによって最終的に34項目について因子分析を行い、5因子を抽出した。(Table 2)

第Ⅰ因子は、客観的な自分の居場所の受容に関してのものであると考えられる。これに関連した内容としては、①性別、男または女としての自分、年齢、過去の自分など「選びようのない要因」、②家族、きょうだいの一員としての自分、親に対する子どもとしての自分、経済状態など、選びようのない部分と、自分の関わり方によって変わる、言い換えれば関わり方を選ぶことがで

現代青年の自己受容に関する分析

きるという「2面を持つ要因」,そして,③生き方,職業,住居,人間関係,現在の自分など,自分で「選ぶことができる要因」からなっているが,いずれも,自分の居場所にかかわる受容としてまとめられると考え,「居場所の受容」因子とする。

Table 2 沢崎尺度の因子構造

| 項 目 | I | II | III | IV | V | h^2 |
|----------------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|
| 家族 | .566 | .074 | .135 | .092 | -.021 | .353 |
| 生き方 | .535 | .330 | .149 | .108 | .121 | .444 |
| きょうだいの一員としての自分 | .500 | .176 | .130 | .314 | .145 | .418 |
| 職業 | .491 | .045 | .070 | -.099 | .131 | .275 |
| 住居 | .480 | .047 | .186 | -.025 | -.027 | .269 |
| 人間関係 | .460 | .449 | .112 | .182 | .022 | .459 |
| 社会的地位(立場) | .449 | .145 | .177 | .100 | .117 | .277 |
| 親に対する子どもとしての自分 | .447 | .137 | .099 | .257 | .095 | .303 |
| 現在の自分 | .447 | .405 | .280 | .194 | .060 | .484 |
| 過去の自分 | .433 | .143 | .210 | .202 | .104 | .304 |
| 経済状態 | .395 | -.034 | .371 | -.030 | .063 | .300 |
| 性別 | .388 | .001 | .014 | .151 | .166 | .201 |
| 年齢 | .340 | .096 | .179 | -.138 | .136 | .194 |
| 積極性 | .064 | .704 | .226 | .062 | .066 | .558 |
| 指導力 | .088 | .616 | .202 | -.038 | .166 | .457 |
| 明るさ | .164 | .541 | .168 | .342 | .069 | .470 |
| 協調性 | .190 | .497 | .085 | .300 | .186 | .415 |
| 決断力 | .094 | .483 | .110 | .064 | .052 | .261 |
| 責任感 | .074 | .478 | .028 | .131 | .450 | .454 |
| やる気 | .232 | .389 | .090 | .165 | .374 | .381 |
| 性的能力(魅力) | .168 | .142 | .625 | .229 | .019 | .492 |
| 顔立ち | .202 | .088 | .608 | .175 | -.014 | .449 |
| 運動能力 | .018 | .215 | .558 | .029 | .153 | .382 |
| 服装 | .199 | .205 | .533 | .155 | .009 | .390 |
| 体つき | .178 | .149 | .497 | .153 | -.018 | .325 |
| 体力 | .172 | .088 | .455 | -.113 | .261 | .325 |
| 知性(学力) | .141 | .214 | .413 | -.144 | .248 | .319 |
| 健康状態 | .180 | .041 | .347 | .096 | .168 | .192 |
| やさしさ | .112 | .161 | .217 | .654 | .300 | .604 |
| 思いやり | .086 | .263 | .113 | .641 | .264 | .570 |
| 男または女としての自分 | .353 | .193 | .240 | .394 | .101 | .385 |
| まじめさ | .130 | .100 | .091 | .201 | .587 | .421 |
| 忍耐力 | .080 | .078 | .098 | .079 | .563 | .345 |
| 情緒安定性 | .217 | .221 | .161 | .208 | .419 | .341 |
| Σa^2 | 3.330 | 3.004 | 2.854 | 1.880 | 1.747 | 12.816 |
| Σa^2 % | 9.8 | 8.8 | 8.4 | 5.5 | 5.1 | 37.7 |

第Ⅱ因子は,生き方,人間関係,積極性,指導力,明るさ,協調性,決断力,責任感,やる気などからなり,これらは,人との関わりにおける振る舞い方に関する受容を意味していると考えられる。振る舞い方は,現在の自分が決めていくとも考えられるが,項目「現在の自分」も高い因子負荷量を示している。これらのことを総合して,「社会性の受容因子」とする。

第Ⅲ因子は,顔立ち,服装,体つきなどの外見と,その外見と関係する「男としての(女としての)魅力」,さらに,体力,運動能力,学力を意味する知性,健康状態に加え,経済状態が関

与していることが示唆されている。これらをまとめて、「外見の受容」因子と考える。

第Ⅳ因子は、必ずしも明確な特徴を示していないが、「やさしさ」「思いやり」は、やさしさそのものを意味するものであり、「やさしさの受容」因子と考える。やさしさそのものの受容であるが、「きょうだいの一員としての自分」「明るさ」「協調性」の関わりも見られる。「きょうだいの一員としての自分」と「親に対する子どもとしての自分」は両方とも家族関係に関するものであるが、「親に対する子どもとしての自分」はこの因子とは明確な関係を示していない。このことは、青年にとって親子関係に関する受容感と、きょうだい関係に対して持つ受容感とが異なるものであることを示唆している。自分自身に対する関心が強く、自分を内省し、自分を成長させていく青年にとって、依存もしくは甘えてきた親は、やさしさの対象としての側面が弱く、きょうだいにはいたわる要素があり、やさしさの受容として表れたことが窺われる。

また、「男または女としての自分」が「居場所の受容」にかかわるとともに、「やさしさの受容」にもかかわっていることについては、選ぶことのできない性の受容は、やさしさによって成り立つ側面ももつということであろうか。以上、多少不明瞭な部分もあるが、明るさ、協調性が加味された「やさしさの受容」因子と考えることとする。

第Ⅴ因子は、情緒が安定し、責任感、忍耐力、やる気を内容としていることから、人間的な強さが窺える。この強さに裏打ちされ、やさしさが加味されたまじめさと考えられることから、「まじめさの受容」因子とした。

(2) 菱田自己受容尺度と沢崎尺度との関係

このような因子構造を持つ沢崎尺度による自己受容得点と、ここで作成した菱田尺度による自己受容得点との関係を明らかにするため、両尺度の因子得点間の相関係数を求めた (Table 3)。

Table 3 自己受容因子と沢崎尺度因子との相関

| | 居場所 | 社会性 | 外 見 | やさしさ | まじめさ |
|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 自 信 | .228** | .555** | .286** | .240** | .169** |
| 自分考え好き | .205** | .328** | .256** | .069 | .090 + |

「自信」因子は、沢崎尺度のすべての因子と有意な相関を示し、とくに「社会性」と高い相関が認められた。他方、「自分を考えることが好き」因子も、沢崎尺度の多くの因子と有意な相関を示したが、「やさしさ」、「まじめさ」については有意な相関は認められなかった。沢崎尺度の「やさしさ」はやさしさ・思いやりの受容を内容としており、「自分を考えることの好きさ」因子は、自分の役割を考える、自分はどんな人間だろうかと考えるなど内省傾向を内容としている。内省する傾向の強さは、自分自身の他人を思いやるなどの他人に対するやさしさに関する受容傾向とは関連が認められないこと、逆に見れば、自分自身のやさしさの受容は、自らを振り返る傾向とは関係がない。

以上から、ここでの菱田尺度は、「自信」因子が沢崎尺度のすべての因子と高い相関を示すなど全般的な自己受容を示している可能性を示し、その意味ではここで作成した尺度は既成尺度に

よる自己受容を測定するものであることが確認された。その一方で、沢崎尺度の「やさしさ受容」、「真面目さ受容」がここでの「自分を考えることの好きさ」因子と有意な相関を示さず、沢崎尺度による自己受容とは異なる側面を測るものである可能性を含んではいる。沢崎尺度で測定しているものとは異なる、やさしさ受容と真面目さ受容を含まない独自の「自分を考えることの好きさ」因子が本菱田尺度の特徴であると考えることができる。因子分析による構造が必ずしも明確ではないが、この自省傾向について特に注目していきたい。

3. 自己受容と諸特性との関係

(1) 自己受容に関連すると思われる特性の因子構造

先にも述べているが、ここでは自己受容傾向と関連すると仮定した特性としては、「安定した人生観を有すること」、「メタ認知（自己客観視）能力」、「自立・自律性の確立」、「適切な対人関係」、「がんばり」、「熱中傾向」を仮定した。即ち、安定した人生観を持っていること、自己客観視を始めとしてメタ認知的思考ができること、自立していること、対人関係が健全であること、ものごとへの取り組みが積極的で努力すること、ものごとへの熱中傾向があること、などが自己受容を促進するであろうと考えた。これらの自己受容に関連すると考えた諸特性の因子構造をみるため、いずれの因子にも明確な因子負荷を示さない項目（因子負荷量の絶対値が.300未満のもの）を除外して、最終的に30項目について因子分析を行い、4因子が抽出された。（Table 4）

第Ⅰ因子は、好奇心が強く、熱中するものを持ち、努力の成果は表われるという認識を持ち、辛くても新しいことにチャレンジするなど、積極的な姿勢を示している。さらに、人との関わりにおいては、出会いを大切にし、他人のよいところを見つかることもうまく、他人の幸せや悲しみにも共感できるというような傾向が表れている。これら2面を含めて、積極的姿勢を加味した「プラス志向」因子とした。

第Ⅱ因子は、精神的よりどころを持ち、人から指図されてものごとをするほうが楽とは考えず、自分流の生き方で生きている傾向を内容としている。さらに、決断するときの自分の基準を持ち、人とうまくいく振る舞い方が分かっている、どんなときにカッとなるかも分かっているというような、自己客観視ができて、冷静でメタ認知的な傾向を示す因子である。この傾向と同時に、熱中するものを持つ情動性も示している。この二つの傾向に対しセルフコントロールがきいている、自立・自律した成熟を意味する因子と考えることができる。これらの内容をまとめて、「精神的有能性」因子とした。

第Ⅲ因子は、人の好き嫌いが激しく、人と対立することも多く、冷静さを失う傾向を内容としている。さらに、失敗を人のせいだと思い、相手を説得しようとする自己中心的な身勝手さが表れている。好きなことを始めたらやめられない、物事に熱中するというのも、この表れを示す一部とも考えられる。同時に、人から傷つけられることも多く、親切な人にはつい甘えてしまうというような、依存的で感情的な不安定さもみられる。これらの内容をまとめ、「自己中心性」因子とした。

菱 田 陽 子

第IV因子は、楽な道を選ぶのではなく、努力しながら、がんばって生きる姿勢を内容としている。物事に熱中し、辛くても新しいことに挑戦していくがんばりも見られる。さらに、親切な人にも甘えることを許さない自分に対する厳しさが、人から指図されて物事をするのを楽とは思えない自主性をもっている。これらの傾向をまとめ、「がんばり」因子とした。

Table 4 諸特性の因子構造

| 項 目 | I | II | III | IV | h^2 |
|--------------------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 好奇心が強い | .585 | .167 | .064 | .173 | .404 |
| 人との出会いを大切にしている | .539 | .146 | -.051 | .063 | .318 |
| 物事に熱中するほうだ | .471 | .108 | .314 | .304 | .424 |
| 人の幸せや悲しみに共感できる | .454 | .064 | .063 | .126 | .230 |
| 辛くても、新しいことにチャレンジ | .447 | .114 | .013 | .429 | .397 |
| 人の良いところを見つけるのがうまい | .408 | .293 | -.159 | -.024 | .278 |
| 好きなことを始めたらやめられない | .405 | .052 | .362 | .094 | .306 |
| 努力の分だけ成果が現れると思う | .350 | .031 | -.056 | -.053 | .129 |
| 私の周りには、尊敬できる人がいる | .349 | .251 | .058 | -.132 | .205 |
| 夢中になるものをもつことは人生を豊か | .343 | .125 | -.021 | -.017 | .134 |
| 精神的よりどころをもっている | .230 | .540 | .071 | -.038 | .351 |
| いざこざを解決する方法は分かる | .157 | .536 | -.068 | -.021 | .317 |
| 熱中するものをもっている | .314 | .410 | .225 | .282 | .396 |
| 人から認められることが多い | .240 | .395 | -.135 | .278 | .309 |
| 自分流の生き方で生きている | .274 | .379 | .137 | .142 | .258 |
| 自分の将来が見当がついている | .220 | .367 | -.041 | .227 | .236 |
| 決断するときは自分の基準で決断する | .031 | .359 | .250 | .181 | .225 |
| どんな時にカットとなるか分かっている | .173 | .338 | .220 | -.072 | .198 |
| 人から指図されて物事をするほうが楽 | -.078 | -.336 | -.026 | -.336 | .232 |
| どう振る舞えばうまくいくか分からない | -.030 | -.472 | .269 | -.143 | .317 |
| 私がどう生きるべきか分からない | -.025 | -.538 | .144 | -.216 | .357 |
| 人と対立することが多い | -.070 | .020 | .598 | .084 | .370 |
| 人の好き嫌いが激しい | -.143 | .115 | .491 | -.108 | .286 |
| 冷静さを失ってしまうことが多い | .229 | -.150 | .465 | -.184 | .325 |
| 失敗を周りのひとのせいだと思う | -.080 | -.102 | .449 | -.112 | .231 |
| 人から傷つけられることが多い | .007 | -.238 | .428 | .023 | .241 |
| 相手を説得しようとする傾向がある | .110 | .251 | .404 | -.021 | .239 |
| 親切な人にはつい甘えてしまう | .200 | .043 | .349 | -.317 | .264 |
| 努力しながら生きている | .233 | .126 | -.055 | .564 | .391 |
| 楽な道を選びながら生きている | .080 | -.080 | .145 | -.521 | .305 |
| 寄 与 | 2.545 | 2.485 | 2.084 | 1.559 | 8.673 |
| % | 8.5 | 8.3 | 6.9 | 5.2 | 28.9 |

先に述べたとおり、当初は、自己受容に関連する6つの特性を考えたが、以上のように4因子の抽出にとどまった。ただし、内容に多少の違いはあるが、「精神的有能性」には、仮想した「安定した人生観を有すること」、「メタ認知（自己客観視）能力」、「自立・自律性の確立」を測ると考えた項目が含まれていると考え、筆者が仮定した内容とは異なる構造であるとは言えないが、今後のさらなる検討が必要である。

(2) 自己受容因子と諸特

Table 5 菱田自己受容因子と諸特性因子との相関

| 性因子の関係 | | プラス志向 | 精神的有能 | 自己中心性 | がんばり |
|-------------------------|------------|--------|--------|-------|--------|
| 菱田尺度の自己受容 因子と自己受容と関連 | 自信 | .369** | .587** | -.064 | .270** |
| | 自分を考えること好き | .216** | .422** | .069 | .089* |

すると思われる諸特性因子との関係を明らかにするために、菱田尺度の自己受容に関する因子得点と諸特性の因子得点との間の相関係数を求めた (Table 5)。

また、これらの関係を別の側面から確認するために、この2因子についての受容傾向の程度によって調査対象を3群に分け、各群についての諸特性の因子得点平均値の比較を行った (Figure 1、2)。この分析によって、受容の程度とその特性との関係をより具体的に明らかにしようと考えた。ここで3群の被検者人数をほぼ同じにするために、それぞれの因子得点の±.440を境界にして低、中、高群を構成した。

この分析は、自己受容傾向と特性との間の関係が直線的傾向にあるか否かを確認するためのものである。例えば、ある変数間の相関係数が有意であっても、その変数間の関係が直線的相関であるということを必ずしも示していないし、或いは、有意な相関係数が得られない場合であっても、この両変数間の関係がないということを意味しないからである。また、3群比較のために、各特性因子得点を従属変数として、1要因分散分析及び多重比較 (Tukey 法) を行っている (Table 6)。この表では、自己受容傾向の程度について、因子得点が低い群、中位の群、高い群について、各特性についての因子得点間に有意差があるか否かを示しているもので、いずれも5%水準の有意性を示している。例えば「低中」欄の有意であることは、その自己受容傾向が低い群と中位の群間に特性の強さについて有意な差が認められることを示している。具体的に見れば、「自信」と、「プラス志向」及び「精神的有能」との関係が直線的であり、自分に対する肯定感が強いほど (自分に対する自信が強いほど)、プラス志向と精神的有能性のレベルが高いことを示

Table 6 菱田尺度による自己受容と諸特性

| | | 低中 | 中高 | 低高 |
|------|-------|----|----|----|
| 自信 | プラス志向 | * | * | * |
| | 精神的有能 | * | * | * |
| | 自己中心性 | * | | |
| | がんばり | | | * |
| 自分好き | プラス志向 | | * | * |
| | 精神的有能 | * | * | * |
| | 自己中心性 | | | |
| | がんばり | | | |

* p<.05

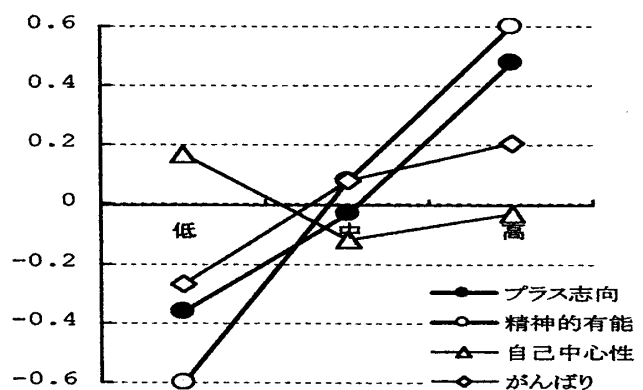


Figure 1 自信

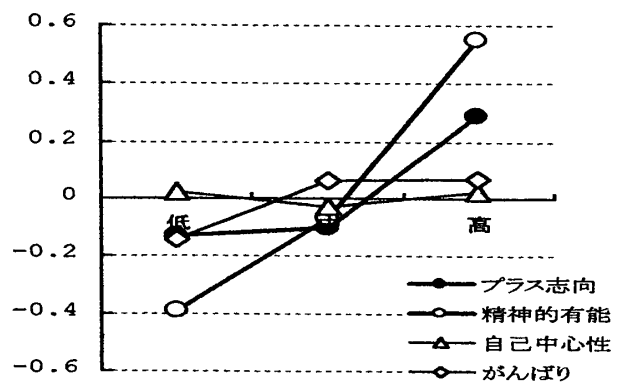


Figure 2 自分を考えること好き

している。これに対して、有意な相関が認められなかったが、自己肯定感の（高い群では特徴的傾向は認められないが）特に低い群で「自己中心的」傾向が認められた。さらに、「がんばり」との間に有意な相関が認められたがその関係は必ずしも単純ではなく、自己肯定感の低い群で「がんばり」が低い傾向（とくに自信がある者ががんばるとは言えない傾向）が認められた。

ここでの「自信」因子は、自己理解と弱点の受け入れが加味された自信のある生き方・態度を内容としており、自己満足であったり、身勝手な自信とは異なるものである。また、「自己中心性」因子は、依存的で感情的な不安定さも見られる因子であることから、「自信」とは逆相関を示すことも予想されたが、結果は無相関であり、自信のある生き方・態度の者でも、依存的で感情的に不安定な者もいるし、そうでない者もいることを示している。自信と感情的不安定さは、青年の中に混在することも予測される。

「自分を考えること好き」因子についてみると、自分を考えることがとくに好きな群の者が、プラス志向であること（相関も有意であるが、好きでない群の特徴は見られない）、精神的有能については直線的に、自分を考えることが好きなほど精神的に有能であることを示している。自立・自律し成熟した者は、自分について考えることが好きで、考える力を持っていることが示唆される。また、積極的姿勢を加味したプラス志向の者も、自分について考えることが好きで、考える力を持っていると考えられる。

自己中心性とがんばりについては、相関によっても平均値の比較によっても、自己受容傾向の特別な関係は認められなかった。青年が自分について考えを深めるときに、自己中心的にならざるを得ない状況があるのかも知れない。

このように、「自信」、「自分を考えることが好き」という自己受容構造を持つ者が、「プラス志向」、「精神的有能性」、「がんばり」（「自信」のみ）という特性を有することを確認した。

(3) 沢崎の「自己受容」と諸特性との関係

沢崎による自己受容が、ここで考えた自己受容と関連すると仮定した諸特性といかなる関係にあるかを明らかにするために、ここで得られた因子分析結果をもとに、自己受容に関する因子得点と諸特性の因子得点との間の相関係数を求めた（Table 7）。

また先と同様、沢崎尺度についても、自己受容傾向がどのような特徴を持っているかを明らかにするために、因子毎に自己受容の程度による3群を構成し、この3群間の相違を明らかにしようと考え、1要因分散分析及び多重比較（Tukey法）も行った（Figure 3～7, Table 8）。

ここで得られた結果によれば、高い相関を示し直線的関係を示すものは、「社会性の受容」と「精神的有能」との間の関係のみであり、その他でも多くの有意な相関が認められたが、それらの間の関係は必ずしも直線的ではなかった。ここで得られた主な結果は、以下のとおりである。

- (1) 居場所の受容と、自己受容関連特性については、「がんばり」以外の特性と、値は低いが有意な相関が認められた。その受容が特に高い者が精神的有能が高く（低位・中位間は差がない）、この受容が特に低い者が自己中心的である傾向（中位・高位間は差がない）を示している。

居場所は、先に述べたように、①自分では選びようがないもの、②選ぶことができる部分と選

びようのない部分の両面を持つもの、③自分で選ぶことができるもの、の3種類が考えられ、この点から考えれば、がんばることによる達成可能性と関連した受容傾向が窺える。

- (2) 社会性の受容については、上で述べたように精神的有能が高いほど社会性について受容している傾向がある（相関も高い）。社会性の受容は自らの振舞い方の受容を示すと考えられるが、精神的に成熟している者ほど、人との関わりについて受容しており、自分の対人的振る舞いについて不安や不満を感じていないことを示している。

それ以外では、いずれも有意な相関も認められるが、特に社会性受容している者が、プラス志向が高く（社会性受容の低位・中位間では差がない）、社会性受容が特に低い者ががんばりが弱い（中位、高位では差がない）。

- (3) 外見の受容は精神的有能性との間に有意な相関が認められたが、特に外見の受容傾向の高い者が精神的有能である（低位の者の目立った特徴はない）。逆に考えれば、精神的に成熟している者は、他者からの評価等にかかわらず、自らの外見についてそれでよいとしている。ここでの精神的有能因子にはかなりメタ認知的側面が強いこともあり、どのような姿勢で生きているか、行動しているかよりも、自分自身をどのように見ているかということが、自らの外見の受容に関連しているようである。

また、この外見の受容は、がんばりや自己中心性との間に有意な相関を認めることはできなかったが、この受容がとくに低い者ががんばりが弱い傾向があり、外見の受容に極

Table 7 沢崎自己受容尺度因子と諸特性因子との相関

| | プラス志向 | 精神的有能 | 自己中心性 | がんばり |
|------|--------|--------|---------|--------|
| 居場所 | .167** | .231** | -.186** | -.017 |
| 社会性 | .341** | .509** | .055 | .252** |
| 外見 | -.060 | .282** | -.079 | .097 |
| やさしさ | .235** | .091 | -.188** | .020 |
| まじめさ | .130* | .055 | -.269** | .344** |

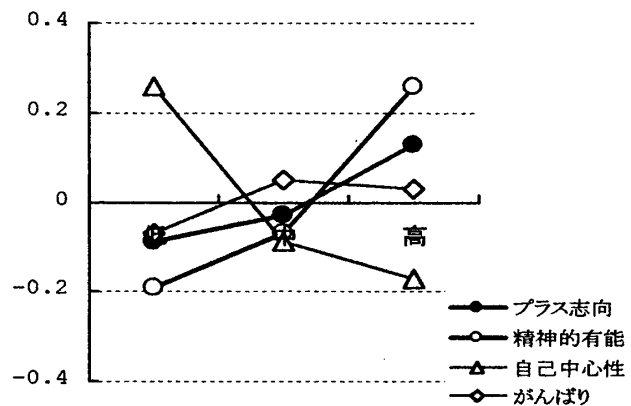


Figure 3 居場所の受容

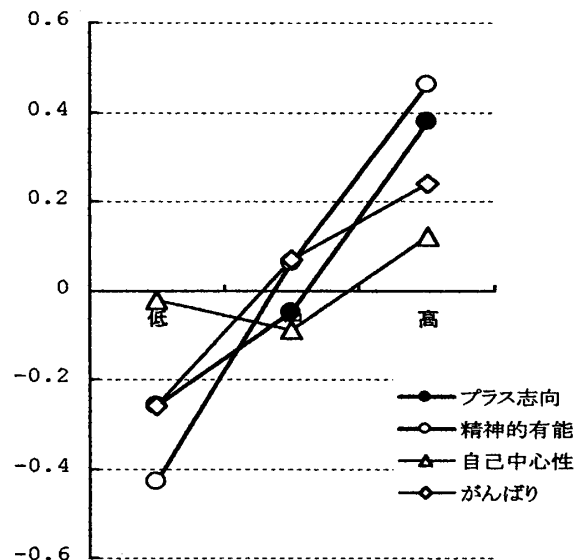


Figure 4 社会性の受容

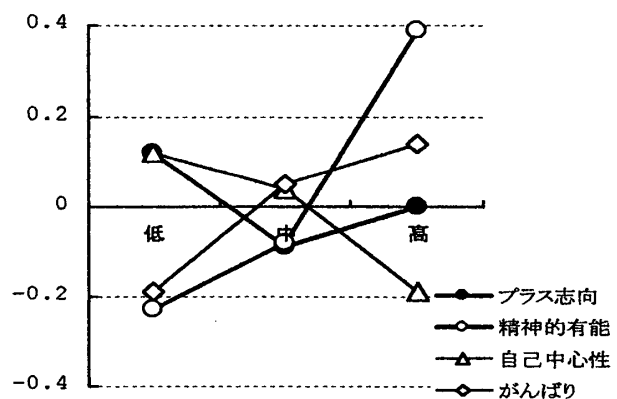


Figure 5 外見の受容

端な差がある場合に自己中心性の相違が認められた。

青年期にあつては、性的魅力、顔立ち、運動能力、服装、体つき等を内容とする自らの「外見」について、その状態によっては気になると思われ、その受け入れは必ずしも容易ではないと考えられる。これらを含め、青年の外見受容についてさらなる吟味が必要であると考えられる。

(4) やさしさの受容については、特にこの受容傾向の強い者がプラス志向が強く、この受容がとくに低い者が自己中心性が強く、がんばりが弱い。

まじめさの受容については、この受容がとくに高い者では自己中心性が弱く、特にこの受容が低い者はがんばりが弱い。

「やさしさ」受容も、「まじめさ」受容も、精神的有能と関連していない。これは、青年の「やさしさ」、「まじめさ」に対する受け止め方が関係していると考えられるが、青年が精神的に有能あるか否かにかかわらず、「やさしさ」「まじめさ」が、すべての青年にとって重要なものであるか、或いは、すべての青年にとって軽く考えられるためであるかであろうと考えられる。

がんばらない青年は、自分のやさしさやまじめさが気になり、自分を受け入れられないと気にしていると推測される。また、自己中心的でない者は、周囲に対する気配り、他人に対する配慮から消極的になるとも考えられるが、自分の「やさしさ」、「まじめさ」はそれでよいとする傾向が見える。

これらを考慮し、青年たちの「やさしさ」「まじめさ」に関する受け止め方、そしてこれらの受容のしかたについて、さらなる吟味

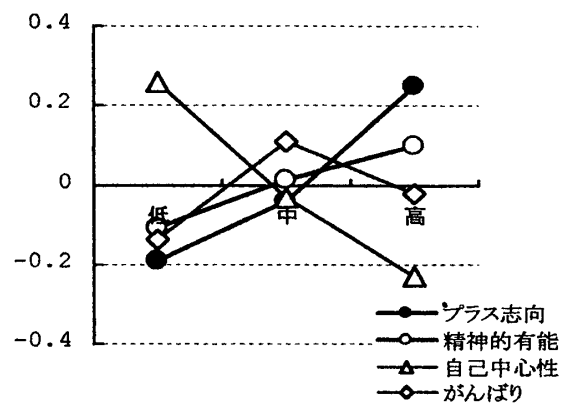


Figure 6 やさしさの受容

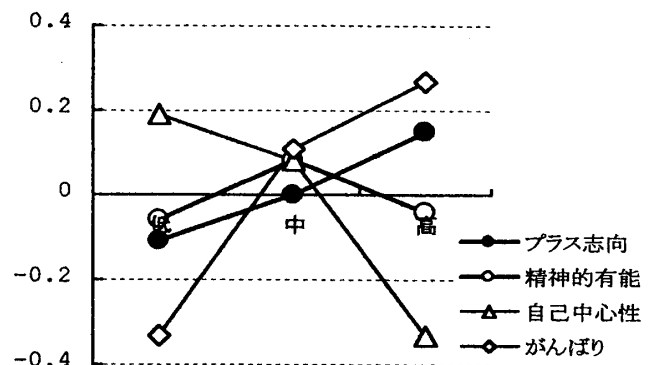


Figure 7 まじめさの受容

Table 8 沢崎尺度による自己受容と諸特性

| | | 低中 | 中高 | 低高 |
|-------|-------|----|----|----|
| 居 場 所 | プラス志向 | | | |
| | 精神的有能 | | * | * |
| | 自己中心性 | * | | * |
| | がんばり | | | |
| 社 会 性 | プラス志向 | | * | * |
| | 精神的有能 | * | * | * |
| | 自己中心性 | | | |
| | がんばり | * | | * |
| 外 見 | プラス志向 | | | |
| | 精神的有能 | | * | * |
| | 自己中心性 | | | * |
| | がんばり | * | | * |
| やさしさ | プラス志向 | | * | * |
| | 精神的有能 | | | |
| | 自己中心性 | * | | * |
| | がんばり | * | | |
| まじめさ | プラス志向 | | | |
| | 精神的有能 | | | |
| | 自己中心性 | | * | * |
| | がんばり | * | | * |

* p<.05

が必要である。

- (5) これらを見ると、社会性、外見、がんばり、さらにはやさしさも含め、即ち、沢崎尺度における居場所の受け容れ以外については、がんばり不足がその受容を困難にする可能性を示唆している。

他方、居場所の受容、外見の受容、やさしさの受容、真面目さの受容について、即ち、社会性の受容を除いたすべての受容について、自己中心性が関連を示し、傾向としては自己中心的傾向がこれらの受容を阻害する傾向が（直線的ではないが）窺える。

この「自己中心性」と「がんばり」については、その関係は微妙に異なるが、自己受容のさまざまな面に関与している可能性もある。

- (6) プラス志向と自己受容との関連に注目すると、「プラス志向」の者には、「外見」以外の、「居場所」、「社会性」、「やさしさ」、「まじめさ」の受け入れ傾向が認められた。積極性と共感を加味した自己肯定的要素を持つと考えられるプラス志向の青年は、自己受容傾向が高いと考えられる。

「プラス志向」と「精神的有能性」は、似ている特性とも考えられるが、「外見」、「やさしさ」、「まじめさ」の受容に違いが見られることから、一部対照的な性格を持つと推測される。「精神的有能性」は自分を客観的に厳しく見ることから、自分の「やさしさ」「まじめさ」の受容を厳しく受け止める傾向があり、「プラス志向」は自己肯定的な自分に甘い性格をもつため「やさしさ」、「まじめさ」を受け入れる傾向を示したとも考えられる。

全体的考察

本研究のために使用した尺度の因子構造については、もとの尺度のものと必ずしも一致せず、標本の相違による可能性が高い。また、筆者の自己受容測定に関しても仮定した因子構造を得ることができなかったが、これに関しても、改めて項目作成をする等の改善が必要である。今後の分析により、各仮想因子の項目を整備することを中心に、吟味・検討していきたい。

本研究では、ここで得られた因子構造をもとに分析し考察している。

菱田尺度による「自信」と、沢崎尺度の「社会性受容」とは、仮定された諸特性との間に類似した相関関係が認められることから、自己理解と弱点の受け入れを加味した自信のある生き方・態度と、人とのかかわりにおける振る舞い方の受容傾向が類似していることを示唆している。

本研究の中で測定された、自己受容と関連すると仮定された諸特性との関係から、ここで測定された自己受容の特徴を明らかにしたが、これら諸特性（プラス志向、精神的有能、自己中心性、がんばりの各因子）によって自己受容が規定されているとも考えられる。とくに「プラス志向」傾向及び「精神的有能」傾向が、このようなさまざまな自己受容の側面を規定しているようである。即ち、これら「自信」、「自分を考えることが好き」、並びに、「居場所受容」、「社会性受容」、「外見受容」が、精神的に成長・成熟していることに密接に関連している。或いは、これらの受容傾向と精神的有能とほぼ同じ内容であることを示しているのかもしれない。

このように、青年の自己受容は、自分を内省する、メタ認知を核とした「精神的有能性」と積極

菱 田 陽 子

的姿勢を加味した「プラス志向」が大きく関与しているが、とくに、自立・自律した成熟を含んでいる「精神的有能性」因子は、安定した自己受容を最も左右する特性の一つとも考えられる。成熟度の高い精神的有能な者は、自己に厳しくはあるが、バランス感覚を持った厳しさであるとも考えられ、他の諸特性の不備を補う因子とも考えられる。

その一方で、「やさしさ受容」及び「まじめさ受容」だけはこれと関連せず、他の受容とは異質なものであることを窺わせる。これらの受容は、菱田尺度の「自分を考えることが好き」因子と有意な相関を示していない。「やさしさ」「まじめさ」は、「外見」「年齢」など誰にもほぼ同じように受け止められるものとは異なり、個人差が考えられる。それぞれ複雑な解釈をする、あるいは安易に考え過ぎていることも予想される。更に、同一個人においても、あるときは安易に、あるときは複雑に考えるなど、解釈に揺れのあることも想像される。つまり、「やさしさ」「まじめさ」の解釈が、個人間、個人内において一定ではないため、自分のことを考えることが好きであったり、精神的に成熟していることとの関連が現れなかったのではないだろうか。今後の研究の中で、青年の「やさしさ」「まじめさ」に対する解釈とその内容、さらには、解釈されている内容と、それらの受容との関係も明らかにする必要がある。

沢崎の「やさしさ」受容は、他人との関わりを意味する社会性に関する受容である。自己受容には、自分に対する許容と愛しさを中心とする内向的な側面、つまり、自分自身に対するやさしさの受容があるのではないかと、筆者は考える。内向的なやさしさは、高いレベルの自分を受け入れるばかりではなく、弱くいたらない自分を愛しく思い、そんな側面をも満足して受け入れることを可能にするのではないだろうか。この許容と愛しさを内容とするやさしさの受け入れによって、トータル的な自分の受け入れが成り立つのではないかと推測される。

自己受容が、メタを含む自己客観視を中心とした「精神的有能性」と、自己に対する許容と愛しさを加えた「やさしさ」の関与が大きく、更に、まじめな許容の姿勢も関与するのではないかと推測のもとに、今後は、「やさしさ」「まじめさ」受容の内容を吟味・再検討し、青年の自己受容構造を解明していきたい。

要 約

現代青年のもつ自己受容の構造を明らかにするために、大学生、短期大学生、専門学校生（男、女、平均19.5歳）を対象に、質問紙（沢崎による自己受容に関する35項目、本研究のために筆者が作成した自己受容に関する20項目、自己受容に関連すると考えられる特性に関する35項目）に対する回答を求めた。これを分析した結果、以下のような事柄が明らかとなった。

- (1) ここで用いた2種類の自己受容に関する尺度及び自己受容に関連すると筆者が仮定した特性に関する尺度について、因子分析により以下のような因子構造を明らかにした。筆者が作成した尺度は、「自信」、「自分を考えることが好き」因子の2因子からなっていること、沢崎による自己受容尺度は、「居場所受容」、「社会性受容」、「外見受容」、「やさしさ受容」、「まじめさ受容」

の5因子からなること、自己受容と関連すると仮定した特性については、「プラス志向」、「精神的有能」、「自己中心性」、「がんばり」の4因子からなること、をそれぞれ確認した。これらは当初仮定された構造と必ずしも一致していないが、現代青年の自己受容及び特性の構造を示すものであると考えられる。

(2) ここで作成した自己受容尺度の妥当性の確認のために、沢崎による尺度との相関をみたところ、相当の妥当性が確認され、この尺度の特徴を明らかにした。

(3) 自己受容の具体的特徴を知るために、ここで測定された自己受容傾向と、仮定した特性との間の関係を、相関及び平均値の比較により明らかにした。即ち、ここで作成した尺度によれば、自分に対する肯定感が強いほど（自分に対する自信が強いほど）、プラス志向と精神的有能性のレベルが高く、また、自分を考えることがとくに好きな者が、プラス志向であること、精神的に有能であることを示した。沢崎尺度については、「精神的有能」が「社会性の受容」とともに、「居場所の受容」、「外見の受容」をもたらしていることが推測されるが、「やさしさの受容」と「まじめさの受容」にはこの傾向は認められず、むしろ自己中心性やがんばりとの関係が認められ、この「自己中心性」、「がんばり」に加え「プラス志向」が、自己受容全般に関与している可能性がある。そして、青年たちの「やさしさ」「まじめさ」に関する受け止め方や受容のしかたについて、さらなる吟味が必要である。

以上の結果を踏まえて、現代青年の自己受容の特徴について、多角的総合的に考察された。

附記 本稿は、日本教育心理学会第44回総会で発表したもの（菱田・金子，2002）に加筆・修正したものである。また、本研究をまとめるにあたり、金子勲榮先生（金沢大学教育学部）に、きめ細かいご指導をいただきました。心よりお礼と感謝を申し上げます。

文 献

- 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽 編 1992 セルフ・エスティームの心理学 ナカニシヤ出版
榎本博明 1998 「自己」の心理学 サイエンス社
菱田陽子・金子勲榮 2002 現代青年の自己受容に関する分析 日本教育心理学会第44回総会発表
論文集, 13.
堀 洋道 監修 山本眞理子 編 2001 心理測定尺度集 I サイエンス社
星野 命 1970 感情の心理と教育（二） 児童心理, 24, 1445-1477
Kirschenbaum, H. & Henderson, V. L. (Eds.) 1989 *The Carl Rogers Reader*. Houghton Mifflin,
伊東 博・村山正治 監訳 2001 ロジャーズ選集（上・下） 誠信書房
Maslow, A. H. 1970 *Motivation and Personality (Second Edition)*, 小口忠彦訳 1987 人間
性の心理学 産能大学出版部
Moretti, M. M. 1990 Relating Self-Discrepancy to Self-Esteem: The Contribution of Discrepancy

菱 田 陽 子

beyond Actual-Self Ratings. *Journal of Experimental Social Psychology*, 26, 108-123

宮沢秀次 1979 青年期における自己受容性の研究 日本教育心理学会第21回総会発表論文集, 258-259

沢崎達夫 1984 自己受容に関する文献的研究(1)―その概念と測定法について 教育相談研究 22, 59-67.

沢崎達夫 1993 自己受容に関する研究(1)―新しい自己受容測定尺度の青年期における信頼性と妥当性の検討 カウンセリング研究, 26, 29-37.

上田琢哉 1996 自己受容概念の再検討―自己評価の低い人の“上手なあきらめ”として― 心理学研究 67, 327-332